

平成二十八年十一月吉日作成

神聖復活、  
実感の瞬間

高嶋善三郎

## 目次

不安恐怖の本質・・・・・・・・・・・・・・・・	3
誤てる想念が消えてゆく宇宙の原理・・・・・・・・	5
直観力を養い、神聖を復活させる・・・・・・・・	6
真実の自己と現われの自己を区別する・・・・・・・・	7
神聖復活を実感する時・・・・・・・・・・・・	7

### お願い

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。

例えば、この点について分かりにくいとか、どの点が心に響いたとか、新しい疑問があるなど、何でも結構です。お聞かせください。

次の連絡先にお問い合わせ致します。

(スマホ) 09033466619  
(アドレス) [zensan@peach.ocn.ne.jp](mailto:zensan@peach.ocn.ne.jp)

## 不安恐怖の本質

私は、昭和四十二年二月、二十一歳の時、五井先生のみ教えに触れ、入信しました。その当時、五井先生は新田道場で個人指導されており、故坂省三様の奥様である、故多々様様に連れられて、五井先生にお会いすることができました。「なかなかたくましいね」と心を一瞬にして癒す霊笛と柏手のひびきで、浄めてくださいました。それから以降一年間よく新田道場と、統一会や暁の祈りが行われた聖ヶ丘道場に通ったものです。

今でも強烈に心に残っているのは、統一会に参加した時のことです。同じ花を見ても、統一会後の花は輝いていたことを覚えています。

就職して、勤務地が地方になり、なかなか統一会に参加できませんでした。二十五歳の時、研修会参加の機会を頂き、当時勤務地であった福井から聖ヶ丘道場に、九月から月一回の頻度で半年間通いました。

その年の十一月の五井先生のお誕生日感謝祭の前日の晩、聖ヶ丘道場の玄関で、昌美先生ご指導の日本舞踊の仕上がりを見に来られた、五井先生にお会いしました。そのとき私は、五井先生に「今晚」と五井先生に挨拶させていただきました。五井先生は、私たちを見て、「今日は研修会ですね」と声をかけてくださいました。私は「そうです」とお答えしました。その間の時間は、おそろしく数秒のことです。

したが、私の心は、引きずっていたものが、一瞬にしてなくなり、自分では想像もしないほどの高揚感と喜びに満たされたことを覚えていきます。

それから以降、とても心が豊かになったと思っていました。

しかし、五井先生ご帰神後、あることをきっかけに、自分が赦せなくなりました。

それは、自分の仕事上で重要なことで、失敗したのです。勿論祈り続け、癒されていくのですが、その失敗の記憶が甦って来ると、いつも恥ずかしさと不安な感情が現れてきて、それに動揺する自分が赦せない。当時自分は祈りが十分でないからだと思い、祈りつづけましたが、どうしても完全にはその状況を脱け出すことができませんでした。

そして、あることに気づきました。自分は五井先生のみ教えを行っているつもりでしたが、五井先生の示された真理をはっきり認識できていないことに気づいたのでした。

それから以降、五井先生の著書をいろいろと読み続けました。

ある日、過去の白光誌の内容を項別に整理した資料に出会い、自分なりそれをもとに整理していきました。

特に自分が理解していない箇所が分かってきました。それが、『人間と眞実の生き方』の「この世の中ですべての苦悩は、過去世から現在にいたる業の想念がその運命と現われて消えてゆく時に起る

姿である」という文面でした。これまで、この文面は何百万回と唱え続けてきましたが、すべての苦悩とは何か。誤てる想念とはなにか。誤てる想念とその運命との関係はどのようになっていくのか等を明確に認識していないことに気づきました。

まず、この世の中のですべての苦悩がなぜ生じたのかを整理してゆくうちに、これを考えるうえでヒントになる五井先生のお言葉に出会いました。ここで、この世の中のですべての苦悩の最も象徴づけられる不安恐怖について説明されています。

「この業というものは神がなくて現われたものではなく、間接的にはやはり神の力によって動かされているのでありますから、神がその必要を認めない時には、崩れ去るのであります。

光一元の世界には闇がないと同様に、闇一元の世界で光の存在がない場合には、闇はそれ自身闇であることを自覚することはありませんが、ひとたび光がそこに放射され始めますと、光と闇との区別がはっきりついてまいります。

そして光が前へ進むにつれて、闇は自身の姿をそれだけつつ、削り取られてゆく形になってきます。

神がその光線を地球界に働きかける場合には、どうしても地球界と同じような物質体の肉体人間を必要とするのです。ところがこの肉体身というのは、地上界に属する物質なので、地上界的な性質をそれ自体が持っており、神の光が地球界の闇を進んでゆくにつれ、未開発が開発されてゆく経過において、種々

様々な動揺や変化が起こってまいります。

それを肉体人間が反動的に考え、かえって自身を闇の側に置いてしまい、闇の崩れゆく姿を自身の崩れゆく姿と同一視してしまつたのであります。

この不安恐怖つまり神の光、靈性を離れた考え方が無明であるわけで、それが業想念の生まれた原因なのであります。『白光誌』1958年5月号7ページ」

このお言葉の中で、注目すべきは太文字の部分です。神である人間が肉体人間になり、自身を闇の側に置いてしまい、闇の崩れてゆく姿と同一視してしまい、神の光、靈性を離れた考えが、不安恐怖即ち業想念が生じたとなっております。

そして、神である人間が肉体人間になった原因の誤てる想念の仕事方について、『新しい般若心経の解釈』14ページに五感六感に観ずるもののほかはないと思うさかさまな考え方や、眞実は神仏と一体であり、本体は、自由自在な神霊である人間を、肉体や幽体という限定された器的、物質的なものと夢のような思い方と解説されています。人間が神様（直霊）から分かれ、靈界、幽界、肉体界へと降りてきたとき、神様（直霊）への想い（感謝）を疎んじた結果といえるのではないのでしょうか。

ここで不安恐怖を生じた原因を整理すると、第一に神である人間が、神様（直霊）への想い（感謝）を疎んじ、直観力を失い、五感

六感に観ずるもの他はないと思うさかさまな考え方や、眞実は神仏と一体であり、本体は、自由自在な神霊である人間を、肉体や幽体という限定された器的、物質的なものと夢のような思い方をしたということ、そして第二に自身を闇の側に置いてしまい、闇の崩れてゆく姿を自身の崩れてゆく姿と同一視してしまい、神の光、靈性をはなれたということでしょう。

### 誤てる想念が消えてゆく宇宙の原理

私が疑問に思った点について、『人間と眞実の生き方』にある「この世の中すべての苦惱は、過去世から現在に至る誤てる想念がその運命と現われて消えてゆく時に起る姿である」という文面に立ち戻り、整理しました。

この世の中すべての苦惱とは不安恐怖を象徴する感情想念であり、また誤てる想念とは、不安恐怖を生じさせた、先に整理した、神のみ心から離れた二つの想念行為として位置づけられると考えられます。

そしてその運命とは病氣や不幸や貧乏などの状況をさします。現われて消えてゆくのは、誤てる想念(業生)とそれによって生じたすべての苦惱です。

誤てる想念(業生)と、運命と現われてゆく病氣や不幸や貧乏との関連性について、『老子講義』第九講(道德經の22章)において次のように宇宙科学の原理から解説されています。

宇宙の根源の素粒子である宇宙子は、常に新たに宇宙心の中から放出されており、古い宇宙子は、次々と役立っては消滅してゆくことになっている。そして宇宙子というのは精神的な波動となっている宇宙子となっているものも、物質的な波動となっているものもあり、この精神と物質の調和によって、この地球世界も成り立っている。この精神と物質の宇宙子は、常に新陳代謝しているのであり、舜々刻々古いものと新しいものが代わってゆくのである。この原理を知らないで、いつまでも古い自己や事物に把われていると、その古い自己なり事物なりを消し去るために、新しい宇宙子が次々と宇宙心から送りこまれて参りまして、嫌でも応でも、新陳代謝させられてゆくのである。そのように、古い自己の習慣性、古い事物への把われの想念波動が、消されてゆく姿として、病氣や不幸や、国と国との間では戦争などという、弊れる状態が起ってくるのである。

五五井先生はこれを消えてゆく姿といわれ、すべて新陳代謝の原理によるのであり、恐れる必要はない。それは常に自己なり、人類なりを高め深めて、眞実の神の子と成し、神の世と成すための神のみ心であるからなのである。すべての人々が、永遠の生命にそのままなかり得て、滅せず傷つかずの眞(神)人としての誕生を、神々は願っているのだから、その為に救世の大光明という地球人類救済の大きな慈愛の力が現在地球に働きかけているのであると言われているのです。

つまり、一見最悪の状態である病氣や不幸や貧乏の姿を通して、誤てる想念(業生)が消えてゆき、それに従って眞実の神の子となっ

ていくと言われているのです。そしてこの原理をはっきり理解することにより、はじめて運命と現われた病気や不幸や貧乏の体験の記憶は、これらが真実の神の子と成っていくための原動力と受け止めることが出来るのではないのでしょうか。

これらのことを認識しないで、誤る思いの仕方を改めなければ、また同じような状態が現われてくるということが分かってきました。

これらのことを認識して、消えてゆくプロセスの中で、我即神也の我（光側の自分）に立ち戻ったとき、不安恐怖は光に還元され、癒されるといえます。つまり、消えてゆく姿に想いを向けるのではなく、すべては我即神也を現わすプロセスと観ることに徹する、また、大難を小難にしていただと、守護の神霊に感謝し、守護の神霊に想いを向け続けることが大切ということでしょう。

そうすると、心から離せなかった記憶が、自分の人間力をパワーアップさせてくれるものとして、受け止めることができ、心から解き放つことができることに気づきました。

しかし、消えてゆくプロセスに直面して、我即神也の我（光側の自分）に立ち戻るには、日頃からの精進が不可欠なものにも気づきました。

### 直観力を養い、神聖を復活させる

この誤る思いの仕方や業想念等を光に還元するために、その方

法が『人間と真実の生き方』に示されています。

そして、誤る思いの仕方や業想念等を改め、神としての自分をどのように復活させていくかについて、五井先生、昌美先生が言われているのは、最終的には肉体の人間になっていったときに失った肉体外の六感（直感）直覚（神智）（即ち直観力を取り戻す、養うこと）といわれているのに、気づきました。

これについて、昌美先生著の『次元上昇』の100ページに解説されています。それを要約しますと、次のようになります。

直観力は、ひらめきであり、心に直接的にひびいてくるもので、特に必要な直観力は、否定的観念、暗黒的想念の波動を見極める直観力だと言われています。これが養われてくると、神の叡智をキャッチできるようなると言われています。

そのためには、まず、自らが放つ想念と波長が合う、周りの想念を引き寄せくるので、祈り、自らの想念を浄める。そして日頃の自らの想念のあり方として、すべての物事について原因結果だけでなく、一瞬一瞬のプロセスにも愛を注ぎ、感謝を注ぎ、否定的想念や言葉は、死語にしていくことを勧められています。

否定的想念、暗黒的想念の波動を見極める直観力が、大いに養われてくると、自らの本心が放つ波動が神の波動、光の波動であり、強力なるパワー、エネルギーを持ち、宇宙神の光の一筋そのものであるため、いかなるマイナス波動からも決して影響は受けなくなり、すべて

は完璧にうまくいく。幸せて、平和で、調和に満ちた人生が結果としてもたらせてくれると解説されています。

### 真実の自己と現われの自己を区別する

一方、五井先生は、どのみうに言われておられるのでしうか。昌美先生が、最も必要なものとして、否定的想念、暗黒思想の波動を見極める直観力であると解説されているのに対して、五井先生は、生命の本源の世界につながっている自分と肉体頭脳知識や頭脳に残っている体験で知る自分の区別が出来る心境といわれています。

五井先生著の『老子講義』14講では、「人を知るは智なり、自ら知る者は明なり。人に勝つ者は力あり。自ら勝つ者は強し。足ることを知る者は富めり。強いて行う者は志有り。」(道德経第33章)

人を知るのは智でもできるが、想いを静め、心を深めて、じっと、生命の本源の世界にまで入ってゆかないと、真実の自己と、現われの自己との区別をはっきりつけて、真実の自己、大生命の分生命である自分というものを知ることができない。そういう境地になることを明(めい)というのだ。あらゆる業想念波動を超える程の強い意志力は、やはり明といわれる程の心境にならぬと現われぬことなのである。想念を常に物質世界の中に置かず、神のみ心の中に入れてきている人は、如何なる環境にいても、足ることを知る人であり、心富める者である。何事にも全力を挙げてぶつかってゆける人こそ

志有る者として、神は天命を成就させるのである。

自分とは何かに焦点をあわせて整理すると、次のようになります。自分について、生命の本質の世界に繋がっている自分と、肉体頭脳知識や頭脳に残っている体験で知る自分、言い換えれば、真実の自己と現われの自己がある。この二つの自己の区別を知ることが、心を深めて、じっと、生命の本源の世界まで這ってゆかないとできない。真実の自己と現われの自己を知りはじめると、すべての想念行為は正しくなり、他人の言に左右されたり、地位や物質や情愛で動かされたりすることがなくなり、神のみ心のまま、本心そのまま行為ができるようになるといわれています。

### 神性復活を実感する時

私は、不安恐怖の本質を知り、それを光に還元する方法を確認できた時、これまで昌美先生により示されたご神事を毎日してきたこととありがたさが理解出来ました。

我即神也、人類即神也の宣言文や印、光明思想徹底行、地球感謝行、そして、私たち一人一人が天に刻印した言霊「全ては完璧、欠けたるものなし、大成就」などはすべて私たちの意識を我即神也の我にいつても合わせられる行をさせていただいたことに気づいたので。

私たちが目指す、昌美先生の言われる、否定的想念、暗黒的想念の

波動を見極める直観力や五井先生の言われる、生命の本源の世界に繋がっている自分と、肉体頭脳知識や頭脳に残っている体験で知る自分の区別が出来る心境は、これらの行によってほぼ完成されているのではないのでしょうか。ただ、私たちにその自覚がないからだけかもしれません。

それでは、どのように自覚を持てばそのような心境になったと言えるのでしょうか。

ある時、五井先生の次のようなお言葉に出会い確信しました。

「あれは運命だ、これも運命だ、という人がいます。大体の人は、自分が運命の流れの中に入ってしまっただけで、その流れに左右されていくだけです。」

ところが本当は、自分というものと運命というものは違うのです。運命というものは、前生を含んだ過去において作ったものが、今現れて消えてゆく姿だけのものなのです。

**運命それ自身が今の自分ではないのです。**たとえ運命がよからうと悪からうと、今の自分のもではないのです。すべて過去世からの想念行為が現れては消えてゆく姿なのです。ですから運命環境が悪くても、それは今の自分が悪いからではない。また運命が素晴らしくよくても、それは今の自分が善いから、えらいからというわけではない。それはすべて過去世から想念行為の蓄積が、現れて消えてゆく姿なのです。

ですから運命や環境が悪いから、といって今の自分を嘆き悲し

み、責め卑下することはありません。また運命環境がよいからといって、感謝こそすれ、自惚れたり威張ったりしてはいけません。それはみな消えてゆく姿なのです。

では今の自分はどこになるのか。今の自分は神の中にいるのです。**神の生命と全く一つの個性をもった永遠の生命**なのです。そして現れてくるものはすべて消えてゆく姿。

この信仰に徹すると、生き死の恐怖不安に把われなくなり、生き続ける生命がある、という不動心を会得できるのです。『如是我聞』73ページ187)

どのような運命のなかにあっても、今の自分ではない、今の自分は神の中に存在し、神の生命と全く一つの個性をもった永遠の生命であるという自覚です。いいかえれば、常に神への感謝の念が湧き出る、そして周りのすべてに感謝できる。そしてどのような状況になっても、不安恐怖を光に還元できるという確信が出来る時、そのような心境になったと言えるのではないのでしょうか。そしてその時自分が神性復活を実感したことになるのではないのでしょうか。

と